

体育の授業における ICT 活用が運動有能感に及ぼす影響

高見 早桜理 (熊本大学)

1. 目的

本研究の目的は、ICTを活用し、自己の動きを視覚的にフィードバックすることで、自己の学習課題や状況を認知させ、「統制感」を中心に運動有能感の向上を図っていくことである。

2. 研究方法

- 1) 対象者 熊本市 S 中学校 2 年生 30 名。
- 2) 調査時期 令和 6 年 9 月上旬から 10 月中旬にかけての全 10 時間。
- 3) 分析方法
 - ・運動有能感 単元前後において、(岡澤 1996) が作成した運動有能感尺度を基にした質問紙による質問紙調査
 - ・技能の伸び 種目ごとに pre post の動画を撮り体育実技の副読本を参考に技能を点数化
 - ・自由記述 自由記述を「プラス記述」「マイナス記述」「次を見通した記述」に分類
 - ・感覚の一致率 技を終えた後の感覚と動画を見た後の感覚でそれぞれ good もしくは bad を付けてもらいその一致率を分析

3. 結果と考察

- 1) 運動有能感について
「統制感」「受容感」は有意な伸びが見られた。要因として「統制感」については、技ができる・できないにかかわらず、ICT を自分の小さな成長を実感するものとして活用することができたこと。また、技ごとにグループを作り練習をすることで学び合い教え合い活動を行うことができたことが「受容感」を向上させた。
- 2) 技能の伸びについて
単元前後において、統制感向上群低下群ともに技能の伸びが見られた。その要因の一つとして、ICT を活用して自己の技を客観的に見ることができたことやその気づきを中心に練習を繰り返していたことが考えられる。

3) 自由記述について

向上群は、低下群に比べて、「プラス記述」「次を見通した記述」の割合が高くなっている。しかし、向上群の中には、技能の伸びが 0 点の生徒がいた。その生徒の自由記述では、技のできる・できないにかかわらず自分の小さな伸びや成長を視覚的に確認できるものとして ICT を活用していた。

4) 感覚の一致率

統制感向上群については、低下群に比べて、単元進行に伴い、感覚の一致率が向上した。単元進行に伴って、技を行った直後の感覚と客観的に動画で自分の技を見たときの感覚が一致する確率が高くなった。

4. 結論

本研究では、「統制感」を高めるために、技が終わった後のできた感覚を ICT を用いることで、客観的に把握できるようにすることを重点的に授業を行った。その結果、ICT を活用し自己の技を客観視できるようにし、教師がそれを用いて自己の成長を実感できるように働き掛ければ「統制感」にプラスに作用する。一方で、「統制感」が低下した生徒がいたことも事実である。ICT を用いて自らの動きを振り返ることができるようになったことで、自分のできた感覚とビデオで見る自分の動きとの間にずれが生じ、「思ったほどできていない」と感じさせてしまったことが原因であった。

5. 主な参考文献

- 1) 岡澤祥訓 「小学校低学年用運動有能感測定尺度の作成」 奈良教育大学紀要 第 50 巻 第 1 号 (2001)
- 2) 北見裕 「器械運動の授業における教え合い学び合い活動が生徒の運動有能感に及ぼす影響」 茨城大学教育実践研究 第 27 号 pp77~90 (2008)